

1926年27年における魯迅の民衆像と 知識人像についてのノート（中） ——魯迅の民衆像・知識人像覚え書（2）

中 井 政 喜

I、はじめに

II、『朝花夕拾』『華蓋集統編』等における社会像・民衆像・知識人像等

一、社会像

二、民衆像（下等人像）（以上前号）

三、知識人像（以下今号）

四、まとめ

III、四・一二クーデターの衝撃と国民革命の挫折（以下次号予定）

IV、さいごに

II、『朝花夕拾』『華蓋集統編』等における社会像・民衆像・知識人像等

三、知識人像*1

前述のように、魯迅は1925年末当時、挫折した改革者としての心情と復讐観から基本的に脱却しつつあった（基本的には、「孤独者」〈1925・10・17〉においてなされたと考える*2）。

また、1926年の三・一八惨案をつうじて、中国変革のいっそう緊要な当面の焦点は、権力を握る横暴な専制的軍閥政府、軍閥支配体制にあると認識した。1926年、時はまさに国民革命が順調に進展するかに見えたその高揚の時期であった。

魯迅は、1926年の『朝花夕拾』（北京未名出版社、1928・9）の諸作品において、中国の民衆像・知識人像を再検討し再構築しようとした。上述のように、語り手魯迅は記憶の中にある民衆をあるがままに語り^{*3}、一側面としての新しい民衆像が出現した。それは1927年以降に、魯迅が現実における民衆の姿を測り直すための準備段階となったと思われる。そして知識人についても、魯迅は過去の成長過程の回想の中で、あるがままの知識人の姿を語り、測り直し、そのことによって過渡的知識人としての彼自身の今後の生きる道を、内省し探究しようとしていると思われる。過渡的知識人として新しい動向（国民革命の進展と、中国変革の展望）にどのように対処するのか。魯迅は1927年1月広州に行き、「革命の策源地」広州で国民革命のための「補佐」^{*4}的行動（中山大学での教職をつうじて）をとることを選択した。

魯迅には、『朝花夕拾』（前掲、1928・9）において民衆だけを特に取りあげる意図はなかったと思われる。旧社会にはいつも民衆の姿と、旧社会の中で考え、行動する知識人（読書人）が常に意識されていた。魯迅の人生の過去におけるあるがままの民衆の姿と、過去における過渡的知識人の姿が、『朝花夕拾』（前掲、1928・9）で描かれた。

すなわち清朝末期の異民族による封建的支配構造のもとで、知識人がどのように生きていたのかを、語り手魯迅は1926年の回想（『朝花夕拾』）の中で確認しようとした。これは、1926年当時語り手にとって、同時代の清末の過渡的知識人がどのように見えたのか、彼らがどのように生きていたのか、を語るものである。

『朝花夕拾』（全10篇〈そのほか、「小引」、「后記」〉、北京未名社、1928・9）の後半の五篇以降、知識人が取りあげられる。「従百草園到三味書屋」（1926・9・18）では、私塾の先生という旧知識人、「父親的病」（1926・10・7）では、二人の漢方医の治療と、患者である魯迅の父親という旧知識人の、闘病における最後の生き方が描かれる^{*5}。「瑣記」（1926・10・8）では、南京の江南水師学堂の学生（カニ歩きをする上級生）と、鈇務鉄路

学堂での勉強ぶりが表現される。

「藤野先生」(1926・10・12)では、清国留学生の東京での生活と、仙台医学専門学校の教師藤野巖九郎先生の魯迅に対する教育が描かれ、いまなお無言の激励を受けることが述べられる。すなわち魯迅にとって「藤野先生」は、過渡的知識人としていかに生きるべきであるのか、その間に無言の激励を与える存在であったと思われる。「范愛農」(1926・11・18)では、范愛農という、中国変革を志し、辛亥革命後の旧社会に受け入れられずに亡くなる、新党の知識人の運命を描く。ここに、辛亥革命前後において中国変革のために生命を捧げた過渡的知識人に対する(「范愛農」、前掲)、魯迅の哀悼と負い目の感情を窺うことができる。また、それをバネに、廈門の一時の「休息」から国民革命中の奮闘の生活に再起しようとする魯迅の心情を窺うことができる。

ここでは、過渡的知識人としての生き方の探求において、語り手魯迅の心情が色濃く、考え方が明確にうかがわれる「藤野先生」と「范愛農」を取りあげる。

1、奮起と負い目

「藤野先生」(1926・10・12)では次のように語られる。

語り手魯迅は、清国留学生が弁髪を巻きあげ、富士山のように盛りあがった帽子をかぶり、上野公園を散歩する姿を描く。また、中国留学生会館での、留学生のダンスの練習を描き、こうしたことから別の場所へ行きたいと願ったと言う。そして仙台の医学専門学校に入学する。

仙台医学専門学校で、新鮮な授業をたくさん聞いた。なかで、身なりにあまりかまわない、古い外套を着てスリと間違われるような、藤野巖九郎先生がいた。先生はゆっくりとした、しかも抑揚のある口調で講義をした。授業が一週間ほどすぎたとき、語り手は藤野先生に呼びだされ、講義ノートの添削を受けるようになった。

「私が写したノートを提出すると、彼は受けとり、二三日目に私に返還し

て、言った。これから毎週彼にもってきて見せるように、と。私は受けとりひろげてみたとき、びっくりした。同時に不安と感動も覚えた。私の講義ノートは最初から最後まで朱筆で添削してあった。多くの抜けたところを補っているばかりか、文法の誤りも一つ一つ訂正してあった。彼の担当する授業、骨学、血管学、神経学が終わるまで、このようにしてずっと続いた。」(「藤野先生」、1926・10・12)

学年試験が終わって、秋に成績の発表があると、語り手は中程の成績であった。新学期が始まってから、クラスの幹事が下宿を訪れ、彼の講義ノートを見たいと言い、一とおり見て、立ちさった。その後語り手は、「なんじ悔い改めよ」という文句で始まる、分厚い匿名の手紙を受けとった。藤野先生が講義ノートに印を付けて、試験問題を教えたために、彼がこのような成績をとることができたというものだった。数人の同級生が幹事の検査の非礼を非難し、検査の結果を発表するように求めたことにより、この噂は根拠のないものであることが明らかとなった。

「中国は弱国である、だから中国人は当然低能児である。点数が60点以上であったのは、自身の能力ではない。彼らが疑ったのも怪しむに足りない。しかし私は続いて中国人の銃殺を参観する運命となった。第二年目にはカビ学の授業が増えた。細菌の形状はすべてスライドで示された。一段落が終わり、まだ時間があるときには、いくつか時事のスライドが映された。もちろん日本がロシアに戦勝した情況である。しかしあいにく中国人がなかに挟まっていた。ロシア人のためにスパイとなり、日本軍に捉えられて、銃殺されようとしている。とり囲んで見ているものは一群の中国人であり、講義室にはなお一人私が入った。

『万歳!』 彼らは拍手喝采をはじめた。

この歓呼は、スライド一片を見るたびに起こった。しかし私にあっては、この声はとりわけ耳に触った。この後中国に帰って、犯人を銃殺するのを暇つぶしに眺める人々を見た。彼らも酒に酔ったように喝采をする。——ああ、どのように考えたらよいのか。しかしその時その地で、私の意見は

変わった。」(「藤野先生」、1926・10・12)

第二年目の終わりになって、語り手は藤野先生を訪ね、医学をやめ、仙台を離れることを言った。離れる数日前に写真をくれ、その裏には「惜別」と書かれてあった。その後、語り手は音信をせず、約束の写真を送らなかった。

「しかしどうしてか分からないが、私はなおいつも彼のことを思い出す。私が自分の先生だと思う中で、彼は最も私を感動させ、私に励ましを与えてくれた一人である。ときに私はしばしば思う。私に対する熱心な希望とたゆまぬ教えは、身近に言えば、中国のためである。すなわち彼は中国に新しい医学があることを希望した。遠大に言えば、学術のためであった。すなわち新しい医学が中国に伝わることを希望した。」(「藤野先生」、1926・10・12)

「夜、疲労して、怠けたいと思うときに、灯火のなかで彼の黒く痩せた顔を仰ぎ見ると、今にも抑揚の強い言葉を話しだしそうである。それは急に、私の良心を思いおこさせ、勇気を増してくれる。そこでたばこに火をつけ、さらに〈正人君子〉の類が深く憎む文章を書き続ける。」(「藤野先生」、1926・10・12)

「藤野先生」(1926・10・26)は、当時の日本の知識人の姿(学生から教師を含めて)を、そして清国留学生の姿を、1926年の回想の中に描きだしたものである。そこに彼らに対する毀誉褒貶があり、また藤野先生のような、後年まで魯迅を励まし続ける存在となった一人の教師の姿があった*6。藤野先生は、語り手に対する希望とたゆまぬ教えをつうじて、中国における新しい医学の興起と発達を希望した*7。藤野先生のような、希望をもって異国の学生の教育にあたり、理想に献身する知識人の存在が、1926年当時、語り手を励まし、奮起させるものであった*8。

語り手魯迅がそうした無言の激励を糧にして、手にとるペンの矛先は、軍閥権力と結託する〈正人君子〉の類に向けられている*9。

「范愛農」(1926・11・18)では次のように語られる。

語り手魯迅は東京留学中に、徐錫麟が巡撫を暗殺し、捕らえられたというニュースを知る。徐錫麟は日本に留学後、帰国し、巡警の仕事をしていたと言う。徐錫麟は范愛農の先生であった。徐錫麟は心臓をえぐりとられ、巡撫恩銘の護衛兵に炒めて食いつくされた。

同郷会が開かれ、烈士を弔い、満州をののしった。満州政府に抗議の電報を打つことについて議論したとき、語り手の意見にことごとく反対したのが、范愛農である。

「このことから私はこの范愛農が常軌を失っており、しかも非常に憎むべきものだと思った。天下で憎むべきものは、当初満人だと思っていた。このとき始めてそれはまだ二の次だ、第一は范愛農だと知った。中国が革命しないのなら、それまでだが、もし革命をするのなら、まず必ずや范愛農をとり除かなくてはならない。」（『范愛農』、1926・11・18）

ここから、語り手は、天下で憎むべきものが満人だ、と思っていたことがわかる。漢民族の一人として、異民族の軛のもとにある苦痛を、被支配者の苦痛を味わっていたことがわかる。

帰国した後の1910年、故郷で教員をしているころ、語り手は范愛農と再会する。

『『ああ、君は范愛農。』

『ああ、君は魯迅。』

どうしてかわからないが、私たちはともに笑った。それはお互いに対する嘲笑と悲哀であった。」（『范愛農』、1926・11・18）

1910年、辛亥革命の前年に二人は再会する。そのとき二人は笑った。二人の状況は、お互い嘲笑と悲哀にあたるものだったと思われる。范愛農は、古びた木綿の馬褂（短い上着）を着、破れた布靴を履いて、質素な様子をしていた。范愛農は、日本留学の途中で学資がなくなり、故郷に帰った。彼は故郷で軽蔑され、排斥と迫害を受け、ほとんど居場所がないほどだった。今は田舎に隠れ、数人の小学生を教えて、口すぎをしていると言う。

語り手は、なぜ范愛農があの日ひたすら反対したのかを尋ねる。范愛農

は、語り手を彼らが嫌っていたからだと答える。語り手は陳子英とともに、横浜へ新しい留学生を迎えにいった。その時、留学生の荷物から纏足の靴が出てきて、税関の職員がそれを見つけ、物珍しそうに見ていたと言う。なぜこのようなものを持ってきたのか、と語り手は不満に思い、首を横に振った。また、汽車に乗ると、留学生たちは席の譲りあいをはじめ、汽車が動きはじめて、三四人が倒れた。こんなところにまで、尊卑を区別しなければいけないのか、と語り手は不満に思い、また首を横に振った。

しかしこの日到着した留学生の中には、のち安徽省で戦死した陳伯平烈士や殺害された馬宗漢烈士がいた。のちに牢獄にとらわれ、辛亥革命後に、日の目を見ることができたけれども、身に酷刑の傷痕を残した人も、一二いた。

これは、辛亥革命の烈士たちに対する、無残な傷を負った戦士たちに対する、語り手の深い負い目であったと思われる。

「冬の初め頃、われわれの境遇はさらに手もと不如意となった。しかしやはり酒を飲み、笑い話をしていた。突然武昌蜂起がおこり、続いて紹興が光復した。二日目に范愛農が街にやってきた。農民の使う^{せんぼう}氈帽をかぶり、その笑顔はこれまで見たことがないものだった。(中略)

われわれは街をひととおり歩いた。見わたす限り白旗であった。しかし外見はこのようであったけれども、内部の中心は旧態依然たるものであった。なぜならやはり数人の郷紳が組織する軍政府であり、鉄道の株主が行政司長であり、銭荘の番頭が兵器司長だったから……。」(「范愛農」、1926・11・18)

この軍政府は長く続かず、王金發が杭州から軍隊を率いて、紹興に入った。しかし王金發は取りまき連に祭りあげられて、王都督におさまった。語り手は師範学校校長になる。范愛農は監学(学生監)になった。范愛農は監学の仕事と教育を兼ね、実際によく精をだした。

教え子の青年が語り手を訪ね、新聞を発行して、当局を監視したいと言い、語り手魯迅、陳子英、孫徳清に発起人を依頼した。語り手は引き受け

る。彼らは、都督を批判し、都督の周りのものを批判しはじめる。しかもその後、王金發都督から500元の金を受けとり、なお批判を続けた。事態が悪化したとき、許寿裳が語り手を南京の政府に誘ってくれ、語り手はそこへ行くことになる。彼が南京に去って二、三週間後、兵士によって新聞社は襲われ破壊された。語り手が南京から北京に移った頃、范愛農の学監も孔教会に所属する校長によってやめさせられる。范愛農はまた革命前の彼に戻った。語り手が范愛農のために北京で仕事を探すこと、これは范愛農が切望したことである。しかし語り手には機会がなかった。范愛農は知りあいの家に寄食していたが、しかしそこにもおれなくなり、あちこちとさまよった。ある日、芝居を船で見にいき、酔って水に落ちて死ぬ。

范愛農は、語り手が呼び寄せてくれる電報を待ち望んでいた。范愛農が結局足を滑らせたのか、自殺したのか、今にいたるまでわからないという。

これは、辛亥革命を紹興で迎え、ともに革命を喜び、そのために尽力した友人范愛農の、その後の悲惨な運命に対する、共感と同情であり、またその人に対する語り手魯迅の負い目であった。

辛亥革命の烈士のためにも、そして范愛農のような悲運の新党の知識人のためにも、魯迅自身はその遺志を受け継いで生きていかねばならない。生きて、辛亥革命の理想のために、自分なりに尽力すべきではないのか。それゆえ魯迅は、清末当時の知識人の在りようを、古いものを引きずりつつ新しい理想に向かい倒れた過渡期の知識人たち（1917年ロシア十月革命におけるアレクサンドル・ブロークのように〈馬の上日記之二〉、1926・7・7、『華蓋集続編』）を、辛亥革命のために人生の一番大切なものを犠牲にした知識人たち（1905年ロシア革命におけるシェヴィリョフの友人のように〈記談話〉、8・22講演、『華蓋集続編』）を、もう一度自分の負い目をつうじて確認しようとした。

そして「范愛農」には目覚めぬ麻痺した愚民の姿が現れない。

1926年末、卑劣な青年文学者（高长虹等）に対する憤りを爆発させることをつうじて、魯迅は自らの生存の権利を肯定し、中間物としての肯定的

側面（否定的側面だけではなく）を積極的に認めた*¹⁰。そして許広平を愛してもよいのだと考えた*¹¹。そのとき、魯迅は個人の幸福を深く感ずると同時に、まさにそれゆえに辛亥革命の烈士や過渡的知識人范愛農等の不幸に対して、いっそうの深い負い目を同時に意識したと思われる。

魯迅は自分を励まし立ち直らせながら、厦門における一時の「休養」に終わりを告げ、1927年1月、広州の中山大学に赴任し、再び奮闘の生活に入ろうとする。

2、自らの生き方にかかわる過渡的知識人（文学者）像

(1) 武力の前での文芸の無力感について

この頃魯迅は、文芸が武力の前においては無力であり、文章を書くのは失敗者の象徴であるかのような、としている。「魯迅先生の笑話」(Z.M、1925・3・8、『集外集拾遺補編』所収、のちに『華蓋集』后記)〈1926・2・15〉に再録)では次のように言う。

「話をしたり文章を書くのは、失敗者の象徴であるようです。いま運命と悪戦している人は、こうしたものにかまっていられません。本当に実力のある勝利者も多くは声をたてません。たとえば鷹が兎を捕らえるとすると、泣き叫ぶのは兎であって、鷹ではありません。」(「魯迅先生の笑話」、Z.M、1925・3・8、『集外集拾遺補編』)

しかし魯迅は筆が役に立たないとわかっているにもかかわらず、それによって流言や「公理」に対して徹底的に抵抗する。「『魯迅景宋通信集』二四」(魯迅、1925・5・30)で次のように言う。

「そいつら〔女師大校長楊蔭榆を支持する派——中井注〕は何でもやる者たちであり、言葉は仁と義で、行いはなんと比べても劣る。私は筆が役に立たないとはっきり分かっている。しかし今はこれしかありません。これがあるだけで、しかも物の怪に妨害されなければならない。しかし発表するところがありさえすれば、私は放しません。」(『魯迅景宋通信集』二四)、1925・5・30)

「我還不能〈帶住〉」(1926・2・3、『華蓋集続編』)で次のように言う。

「私自身も、中国で私の筆は比較的切っ先の鋭いものであるとしなければならぬし、話もときには容赦のないものである、と分かっている。しかし私はまた、人々がいかに公理と正義の美名、正人君子の徽章、温良敦厚の仮面、流言や公論の武器と、口ごもりこみいった文章を用いて、私利私欲をとげ、刀もなく筆もない弱者を息つくこともできなくさせたか、を知っている。もしも私にこの筆がなかったならば、欺かれ軽蔑され、訴えるところもない一人であった。私はだから常にそれを用い、とりわけ麒麟の皮の下から馬脚を現すのに用いなければならない、と自覚した。万一それらの虚偽の者たちが痛みを感じ、いささか覚り、技量にも限界があることを知って、仮の面目を装うのを少なくするならば、陳源教授の言葉を借りれば、すなわち一つの『教訓』である。」(「我還不能〈帶住〉」、1926・2・3、『華蓋集続編』)

魯迅は文筆が実際の武力(実力)に対しては無力であると考えた。しかし直接の武力に対してではなく、流言や「公論」に対して、そして軍閥権力を背景にした流言や「公論」に対して文筆によって抵抗できる場合には、それによって徹底的に抵抗しようとした。それは女師大事件、三・一八惨案の経過をつうじて、魯迅が汲みとった知識人の役割についての一つの教訓である^{*12}。

(2) 過渡的知識人(文学者)としての魯迅の生き方の追求

魯迅は、国民革命の高揚とその挫折(1927年)をへて、革命文学論争の中で1928年頃からマルクス主義文芸理論と本格的に接触し受容していく。こうした過渡的知識人(文学者)魯迅の場合、何らかの形で中国変革をつねに展望した自らの生き方と、文学観のかかわり方において、1926年から1928年にかけて次のような変化が見られる、と思われる。この点について1926年、27年を中心にして概略を述べておきたい。

①魯迅は(時期は異なるが、有島武郎と同様に)、1926年27年頃、自ら

が労働者階級に属するものではなく、また階級移行は不可能である、と考えた。両者は、そのため変革の過程において、労働者階級の側に直接的に関与するのではなく、矛を翻して自らの属する階級を批判・攻撃することを選択した。それは、魯迅が労働者階級に対する自己限定的な連帯の立場をとった、と言えるものと考ええる*13。

のち1929年頃、魯迅は知識人等の階級移行を認め*14、革命における知識人の独自の役割を認めている*15。

②上のことと表裏の関係にある革命文学について、1926年27年頃、魯迅は、革命人が文章を書けば、その文章は革命人の意識に裏づけられて書かれるので、それが革命文学となるとした。*16。そして魯迅自らは、革命人ではないことを痛切に自覚していた*17。

前述のように、のち1929年頃には、魯迅は知識人等の階級移行を認めるようになり、階級意識を獲得することをつうじて、知識人も革命文学を書くことができる（十分条件ではないにしろ）と考え、また革命の過程における知識人の独自の役割を認めるようになった。

③1926年27年頃、魯迅は自己（内部要求、個性）に基づく文学と宣伝を、二律背反の関係にあるものと考えた。しかし1928年以降魯迅は、文学を社会現象の一つとして位置づけて考えた。作者の主観的意図のいかんにかかわらず、世の中に出た文学は客観的な一つの社会現象であり、一つの社会現象として社会に作用し影響する。それゆえ社会現象としての文学における宣伝の役割を認めるようになった*18。

④1925年26年頃、魯迅は文学が自己（内部要求、個性）に基づくものであると考え、この自己に基づいた文学であればこそ、社会とのかかわりもありうるとした（これも、有島武郎と共通する考え方である）。

1928年以降、魯迅は、プロレタリア文学（革命文学）も自己（内部要求、個性）に基づく文学であるとした。しかしプロレタリア文学は自己の心境や印象等の狭い範囲に止まるものではない。魯迅は自己に基づく文学という前者の点で、プロレタリア文学にはそれ以前の古い文学との共通点があ

る、文学としての両者の接点が存在するとした*19。

⑤魯迅は1926年、27年において、ロシア過渡期知識人としての一部の作家（例えば、プローク、エセーニン、ソーボリ）が1917年のロシア革命の進行と成功という実際の過程の中で、破滅しあるいは自殺した人生に深い関心を寄せた*20。

以上のように、1926年、27年4月12日（四・一二クーデター）以前において、魯迅は国民革命の高揚期にあって、文学と現実社会の関係をどのようにとらえるのか、自分の生き方はどこにあるのか等を追究する思想的な模索の時期にあったと思われる。そして厦門から広州に移った1927年1月頃、国民革命の「策源地」広州における教育界の教員・学生の状況は、国民党の左派右派の勢力が陰に日に衝突し闘争しているものであった。北京の軍閥政府支配下の学生たちの意識が鋭くとぎすまされたものであることに比べると、国民政府下の広東の学生運動は真剣さに鈍いものがあつた*21。「革命の策源地」広州社会は、下からの革命が行われた社会ではなく、上からの革命が行われた社会であつた*22。旧社会の社会意識が必ずしも克服されてないような社会、軍人と商人が支配する社会であつた*23。

そして魯迅は、1927年四・一二クーデター（広州に波及するのは4月15日）を体験し、それ以後、蒋介石が実権を握る南京国民政府の「革命」による圧制と支配に直面し、1927年10月、わずかな文学活動の余地の残された租界のある、上海に逃れた。

ここでは1926年、27年の国民革命の高揚と挫折という政治的激動の中で、魯迅における過渡的知識人（文学者）としての生き方の追求とその変容に若干触れた。

3、軍閥権力と結託する知識人（上等人）

1925年の「犠牲謨」（『語絲』第18期、1925・3・16、『華蓋集』）は偽善的な知識人の批判であり、「戦士和蒼蠅」（1925・3・21、『華蓋集』）は孫文の欠点をあげつらう守旧派知識人等に対する諷刺と思われる。当時の魯迅

による伝統的国民性の悪批判は、目覚めぬ鈍麻した民衆に対する批判（『野草』、『彷徨』、『華蓋集』等に表現される批判）であるとともに、偽善的知識人、守旧派知識人や、軍閥権力と結託した知識人批判（女師大事件における陳源、徐志摩等に対するような批判）として現れている*²⁴。

女師大事件が表面化して、魯迅がこの事件に関わることになる1925年以降、学生側に立つ魯迅と、軍閥政府当局の支援を受ける楊蔭榆校長の側に立つ陳源・徐志摩等との論争は熾烈なものとなった。陳源等に対する言及は、1925年から1927年にいたるまで、魯迅の多数の雑文や『朝花夕拾』（北京未名社、1928・9）における回想文（例えば、「狗・猫・鼠」〈1926・2・21〉、「『二十四考図』」〈1926・5・10〉等）にも及ぶ*²⁵。

「一点比喩」（1926・1・25、『華蓋集続編』）で魯迅は、山羊のように羊（民衆）を従順に導く知識人について述べる。

「山羊はめったにみない。これは北京でかなり貴重なものという。羊に比べて利口なので、羊の群れを導くことができ、群れはすべてそれに従い、進んだり止まったりする。そのため牧畜家はたまたま数匹を飼うけれども、羊の導き手にするだけで、決してそれを殺そうとはしない。（中略）

人の群にもこのような山羊がいる。大衆を穏やかに静かに歩いていかせ、彼らが行くべきところまで導く。袁世凱はこのことをすこし理解していた。惜しいかな、使い方があまりうまくなかった。（中略）二十世紀もすでに四分の一がすぎ、必ずや首に鈴をさげた聡明な人には幸運がめぐってくるだろう、いま表面的にはいささか小さな挫折を免れないけれども。

そのとき人々は、とりわけ青年は、規則に従って騒ぎもせず浮つきもせず、一心に〈正しい道〉に向かって前進する、もしもこう尋ねる人がいなければ――

『どこへ行くのか?』（「一点比喩」、1926・1・25、『華蓋集続編』）
従順な羊を〈正しい道〉に導くこと、これが「山羊」（軍閥権力と結託した知識人）の役割である。しかも彼らは、何か〈正しい道〉を信じたり、何か「公理を維持する」とかを心の中で本当に考えているのではない、「芝居

をする虚無党」である。

「国故を保存するとか、道徳を振興するとか、公理を維持するとか、学風を整頓するとか……心の中で本当にこのように考えているのだろうか。芝居をするとき、舞台のそぶりは、必ずや舞台裏の面目とは違っている。しかし観客は明らかに芝居だと知っているけれども、様が似ているのであれば、そのために悲しんだり喜んだりできる。そこでこの芝居は続けられる。誰かがそれを暴くと、彼らはかえって興ざめに思う。」（「馬上支日記」、1926・7・2、『華蓋集続編』）

「中国の一部の人、少なくとも上等人を見てみると、神・宗教・伝統の権威に対して彼らは、〈信じて〉〈従って〉いるのか、それとも〈恐れ〉〈利用して〉いるのだろうか。彼らの変化に長けていること、いささかも優れた品行がないことを見さえすれば、彼らは何ものも信ぜず従わず、しかし内心とは違ったそぶりをしようとしていることが分かる。虚無党を捜そうとすれば、中国では大変少ない。ロシアとは異なるところは次の点にある。彼らはこのように考えれば、このように言い、このようにする。しかし私たちはこのように考えるけれども、あのように言う。舞台裏ではこのようにするが、舞台ではまたあのようにする……。こうした特殊な人物を、べつに〈芝居をする虚無党〉あるいは〈体面をつくろう虚無党〉と呼ぶ。」（「馬上支日記」、1926・7・2、『華蓋集続編』）

魯迅は、中国の上等人（支配階級と、それに結託する知識人）が、「芝居をする虚無党」であることを指摘する。後に、魯迅は1927年四・一クーデターのときの、国民党右派の裏切り（「芝居をする虚無党」の裏切り）に対する深い憤りを述べている*26。

「藥屋には帳簿机に外国人が一人坐っているだけで、あとの店員はみな若い同胞であり、服装が清潔できれいだった。どうしてか知らないが、私は突然十年後、彼らはすべて高等華人に変わるであろうと感じた。自分はいまむしろ、下等人の感がある。」（「馬上日記」、1926・6・28、『華蓋集続編』）

「こうした同胞に対処するに、ときにあまりにも礼儀正しいのはよろしく

ないと思う。そこで瓶の栓を開け、目の前ですこし飲んでみた。

『間違っていないでしょう。』彼は利口で、私が信用していないのが分かっている。

『ウ。』私はうなずき同意した。実際は、やはり正しくない。私の味覚は麻痺しているほどではない。今回のは酸っぱすぎると感じた。彼はメートル・グラスさえもいい加減に使っている。』（「馬上日記」、1926・6・28、『華蓋集続編』）

これを、『呐喊』の時期の「無題」（1922・4・12、『熱風』）におけるチョコレート・アプリコット・サンドウィッチ売りの屋台の商人（民衆）と比べてみる。この屋台の商人の純朴さに対する語り手の反応と内省に比べると、「高等華人」の卵のいい加減な仕事とそれに対する反感は雲泥の差がある。未来の「高等華人」（軍閥権力と結託し、「芝居をする虚無党」の上等人になるであろう）に対する批判と反発に充ちている。

四、まとめ

この第Ⅱ章において、『朝花夕拾』の諸作品を中心として、魯迅の民衆像と知識人像をそれらの変遷過程の視点から見た。『朝花夕拾』の作品には、「狗・猫・鼠」（1926・2・21）、「阿長与山海経」（1926・3・10）、「無常」（1926・6・23）、「従百草園到三味書屋」（1926・9・18、これ以後の作品は厦門で書かれる）、「藤野先生」（1926・10・12）、「范愛農」（1926・11・18）等がある。

民衆像・知識人像の変遷過程という視点から大まかに見ると、『朝花夕拾』前半（1926・2・21-6・23、「狗・猫・鼠」から「無常」まで、北京にいた時期に含まれる）において、現実のあるがままの民衆像を確認するという作業が魯迅によって行われた。また後半（1926・9・18-11・18、「従百草園到三味書屋」から「范愛農」まで、厦門にいた時期に含まれる）において、過渡的知識人の生き方に対する模索がなされた、ととらえることができる。

1、1925年26年は、魯迅の民衆像から言えば、変化が生じた一つの時期、一つの転換期であった。民衆の置かれた社会的歴史的状況を述べ、また農民革命軍ともなりえる民衆の潜在力を認めた。

2、1926年三・一八惨案により、魯迅は中国変革の当面の緊急を要する、最大の変革の課題が、軍閥の支配権力を打倒することにあることを認識した。国民性の変革の課題は次要の位置に退いた。同時に横暴・凶暴な軍閥権力と結託する知識人に対する激しい憎悪をもった。

上記の1、2の理由によって、魯迅は1926年から故郷の民衆の中におけるあるがままの民衆像を模索しようとし、軍閥権力と結託する知識人に対する憎悪を語った。それは特に、北京時代に書かれた『朝花夕拾』前半を中心とする。すなわち魯迅の民衆観は、「『人道主義』と『個人的無治主義』という二つの思想の起伏消長」（『魯迅景宋通信集』二四、1925・5・3、前掲）の過程を構成する一環であるという性格を脱却しつつあった。

3、女師大事件での軍閥政府を後ろ盾とする校長側との抗争、1926年3月18日の軍閥政府による惨案とブラックリストの漏出等があり、魯迅はこうした闘争の生活の疲れを癒し、恐怖の生活から避難しようとした。そのため、自ら「休養」（1926・6・17、李秉中宛て書簡）と位置づけて、厦門大学に赴任した。その後、1927年1月以後、広州の中山大学に移る。厦門における「休養」状態から、広州における再び抵抗と戦闘の生活に再起しようとする過程で、『朝花夕拾』後半の知識人を中心とする作品には、過渡的知識人としての自らへの激励と范愛農・先烈等に対する負い目が語られた。

こうした過渡的知識人としての生き方に対する模索の背景には、三・一八惨案における魯迅の経験と、国民革命の高揚、とりわけ1926年7月からの北伐の開始によって、広東から国民革命軍が軍閥を打倒しつつ破竹のように進撃した情勢が存在した。

しかしそれにもかかわらず、1926年27年前半の「革命の策源地」広州の社会が、理想とはほど遠い、国民党の左右両派が闘争する社会、軍人と商

人の支配する社会、上からの革命が行われた旧態依然とした旧意識形態の支配する旧社会であったという事情があり、1927年1月広州到着以後、それが魯迅の心に濃い陰影を与えた。

1927年4月12日、上海で、国民革命の挫折に向かったの決定的なクーデターが起こる。

以上、第Ⅱ章で述べてきたことを概略して言えば、1926、27年前半の間、魯迅は基本的に過渡的知識人として生き方の模索・探求の時期にあったと思われる。

注

*1：その後、私が目をとおした小論の主題に関する論文等を次に掲げる。以下適宜に、小論の中で具体的に言及することにする。

〔中国語文献〕

- ①「第一次到魯迅先生的新屋作客」（兪芳、『我記憶中的魯迅先生』、浙江人民出版社、1981・10）
- ②「21世紀魯迅『朝花夕拾』研究新趨勢」（叢琳、『回顧与反思——魯迅研究的前沿与趨勢』、上海三聯書店、2010・4）

〔日本語文献〕

- ①『仙台における魯迅の記録』（仙台における魯迅の記録を調べる会、平凡社、1978・2・24）
- ②「魯迅の仙台時代」（渡辺襄、『魯迅と仙台』、東北大学出版会、2005・8・30、改訂版）
- ③「医学から文学へ」（阿部兼也、『魯迅と仙台』、東北大学出版会、2005・8・30、改訂版）
- ④「『魯迅と仙台』の研究略述」（黄喬生、『魯迅と仙台』、東北大学出版会、2005・8・30、改訂版）
- ⑤「魯迅の解剖学ノートについて」（浦山きか、『魯迅と仙台』、東北大学出版会、2005・8・30、改訂版）
- ⑥「『小にしては中国のため、…大にしては学術のため…』は藤野先生の言葉」

(大村泉、『魯迅と仙台』、東北大学出版会、2005・8・30、改訂版)

- ⑦「魯迅『藤野先生』について——『藤野先生』(1926年)は「回想記的散文」(史実)かそれとも作品(小説)か？」(大村泉、『季刊中国』第86号、2006・9・1)
- ⑧「魯迅医学筆記から読み解く小説『藤野先生』」(坂井建雄、『季刊中国』第88号、2007・3・1)
- ⑨「魯迅の解剖学ノート——藤野先生から指摘された『美術的』解剖図について」(刈田啓史郎、『季刊中国』第88号、2007・3・1)
- ⑩「魯迅の『解剖学ノート』に対する藤野教授の添削について」(阿部兼也、『藤野先生と魯迅——惜別百年——』、東北大学出版会、2007・3・23)
- ⑪「魯迅と藤野先生の19ヶ月(1)——仙台医学専門学校入学の前後」(坂井建雄、『季刊中国』第90号、2007・9・1)
- ⑫「魯迅『藤野先生』と〈虚構論〉」(福田誠、『季刊中国』第90号、2007・9・1)
- ⑬「魯迅と藤野先生の19ヶ月(2)——藤野先生の添削が始まる、1年次の1学期」(坂井建雄、『季刊中国』第91号、2007・12・1)
- ⑭「魯迅と藤野先生の19ヶ月(3)——解剖図の添削をめぐる〈1年次の2学期と3学期〉」(坂井建雄、『季刊中国』第92号、2008・3・1)
- ⑮「魯迅と藤野先生の19ヶ月(4)——2年次の1学期と2学期、退学に至るまで」(坂井建雄、『季刊中国』第93号、2008・6・1)

*2:「魯迅『孤独者』覚え書」(『名古屋大学中国語学文学論集』第3輯、名古屋大学文学部中国文学研究室、1979・2、後に『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第6章として収める)

*3:「魯迅の印象」(増田渉、『魯迅の印象』、角川書店、1970・12・20)は次のように指摘する。

「たぶん私が彼に向かって、中国の文学を勉強するにはどんな本から読んだらいいかとでもきいたものだろうが、彼は自分の幼少年時代の思い出を書いた『朝花夕捨』という本をくれた。(中略)『朝花夕捨』は彼の幼少年時代(および日本に留学していたころ)の彼とその周囲を回憶したもので、なかならず、中国の生活的風習と、その中に生長するものの幼い夢をふりかえったものである。他国から来た私に、そして中国のことを勉強しようとしている私に、まず何よりも先に中国の生活的風習とその雰囲気を知らせようとの用意からであったのだと思う。」

*4:魯迅は「『魯迅景宋通信集』一二」(1925・4・14、『魯迅景宋通信集』、湖南人民出版社、1984・6)で次のように言う。

「当時袁世凱と妥協して病根を植えつけましたが、実際はやはり党人の実力が充

実していなかったからです。ですから前車の轍に鑑みて、こののち第一に重要な計画は、やはり実力の充実にあり、このほかの言動は、ただすこし補佐することができるだけです。」

*5：魯迅は、「中山先生逝世后一周年」（1926・3・10、『集外集』）で孫中山の革命の事業に劣らず、感動したこととして次のことをあげる。孫中山は、西洋医が手をつかねていたとき、ある人が漢方医の薬を服用することを勧めた。孫中山はそれに同意せず、中国の薬はもとより効果がある、しかし診断の知識が欠けている。診断できないのに、どのように薬を用いるのか、とした。人が死に瀕したときは、たいていは何でも試すであろう、しかし孫中山は自分の生命についても、明晰な理性と硬い意志があったとする。

「父親的病」（1926・10・7、『朝花夕拾』）で、語り手魯迅の父親は長患いの中で漢方医の治療を受け、死の淵にいたって、漢方医の勧める薬を断り、前世の因縁という話を拒絶している。前に引用する一文と比較すると、ここには父親の強い精神に対する語り手の敬意がこめられていると解釈できる。

*6：「第一次到魯迅先生的新屋作客」（兪芳、『我記憶中的魯迅先生』、浙江人民出版社、1981・10）は、1924年（6月8日、『魯迅日記』〈『魯迅全集』第14巻、人民文学出版社、1981〉）、兪芳姉妹が魯迅の新居（西三条胡同）を訪れたときのことを次のように記す。

「私たちは先生の寝室に入った、それは〈虎の尾〉と称されているあの部屋である。ここで最も注意を引いたのは、窓の大きいこと、北側から光が入り、採光の良いことであった。私は、先生の机の前の壁に、見知らぬ人の写真がかけてあるのに気がついた。私は先生に、これは誰の写真ですかと尋ねた。以前私は見たことがなかった。先生は私たちに教えてくれた。これは彼が日本で勉強していたときの先生で、藤野先生である、と。彼は、藤野先生の人となり、教育の事業に熱心であったこと、とりわけ藤野先生の彼に対する配慮、彼のためにノートを添削し、ノートの文法の誤りさえも直してくれたこと、別れに臨んで写真を贈ってくれたこと等の経緯を私たちに話して聞かせた。その話しぶりの中に藤野先生に対する限りない尊敬の心情が表れていた。

そのとき『藤野先生』の文章は、まだ書かれていず、この文章についてずいぶん長く構想を温めていたことが分かる。」

*7：『仙台における魯迅の記録』（前掲、平凡社、1978・2・24）「第三章 在学時代の周樹人」の「二 同級生の談話」に次のように藤野先生に関する鈴木逸太氏の談話が記録されている。

「『ええ、これはあの、今のノート事件で私が行った時に、ぼくは何もそういうことはないんだ。今、小にしては中国のため、またひとつは、やはり医学をその中国へ広げたいという考えから、ぼくはやってるんだ。そういうふうなことを話しましたな。』（中略）

『ええ、藤野先生の口からそういったのですから、私らに』
——ですからこういう藤野先生のお考えは魯迅も聞いていたと思うんですが。
『ええ、そうですね。ぼくはそういうつもりで、彼を一生懸命親切にしてやったんだと言っていました』

また、同書「第四章 藤野先生」の「四 藤野先生と周樹人」では次のように指摘する。

「鈴木逸太氏が、試験問題漏洩の噂を先生に知らせた際、先生は、そのような噂を否定し、自分が周樹人を指導しているのは中国の為であり、学問の為であると言ったという（178頁）。それはちょうど『藤野先生』にある『小にしては、中国のためであり中国に新しい医学がもたらされることを希望し、大にしては、学問のためであり、新しい医学が中国に伝わることを希望した』という言葉と符合するものであった。」

*8:魯迅は、厦門を離れたあとの生活について、「『魯迅景宋通信集』九五」（1926・11・28、『魯迅景宋通信集』、湖南人民出版社、1984・6）で次のような決意を述べる。

「この地を離れたあと、必ず私の農奴生活を改めなければなりません。社会方面のために、私は教育にあたるほか、或いは依然として文芸運動を継続するか、或いはさらに良い仕事か、直接会ってから決めます。いまHM〔害馬のこと、許広平を指す——中井注〕の方が私よりずいぶん決断に富んでいると思います、私はこの地に来てから、全く空虚を感じて、もう何の意見ももたないかのようです。」

*9:「魯迅『藤野先生』の執筆意図について」（白井宏、『香川大学国文研究』第15号、1990・9・30）は次のように指摘する。

「問題は、『藤野先生』執筆の内的欲求が、何に起因するかである。筆者には、前に述べた、許広平や許寿裳宛の書簡から読み取れる、〈正人君子〉たちに対する憎悪の念のこの時期における急速な高まり以外にはない、と思われる。」

しかし私には、この作品の意図は魯迅が国民革命の高揚を背景として、厦門の「休養」状態から再び広州での奮闘の生活に入ろうとする自らを、藤野先生という知識人の生き方・たゆまぬ教養を回顧することによって、励ましたものと考えられる。そして軍閥と結託する〈正人君子〉とは、これからも対決し闘わなければな

らない典型の一つとしてここに登場していると理解する。

*10:魯迅の〈中間物〉という規定について、私は『魯迅探索』（汲古書院、2006・1・10）の第3章「魯迅の復讐観について」の注32で、汪暉氏（「歴史的“中間物”と魯迅小説的精神特徴」、『文学評論』1986年第5期）の考えを取りあげ論じた。私の場合はむしろ、「魯迅の“歴史的中間物意識”について」（丸尾常喜、『学人』第1輯、江蘇文芸出版社、1991・11）における、「自己肯定と自己否定とを共存させた冷静な認識」という解釈に賛成する。

*11:「『魯迅景宋通信集』一二四」（魯迅、1927・1・11、『魯迅景宋通信集』、前掲）で次のように言う。

「彼ら〔高长虹等を指す——中井注〕はうわべは新思想であるかのようですが、実際はみな暴君酷吏であり、探偵、小人です。もしも彼らに気兼ねするならば、彼らはさらにつけあがるでしょう。私は彼らを軽蔑するようになりました。私はときには自ら恥じて、あの人を愛する資格がないと心配しました。しかし彼らの言動思想を見てみると、私も決して悪い人間ではない、私は愛することができると思います。」

*12:これは文筆が作用しうる分野を明確に限界づけたものと言える。文筆は武力に直接に抗することには微力であるが、しかし武力を背景とした言論に抗することができる。この意味で、「革命時代的文学」（1927・4・8講演、『而已集』）における革命的武力の作用を正当に評価する発言につながると思われる。

*13:「魯迅と『壁下叢書』の一側面」（『大分大学経済論集』第33巻第4号、1981・12・21、のち『魯迅探索』（汲古書院、2006・1・10）の第10章として所収）で、この点について論じたことがある。

*14:魯迅は階級移行が可能であることについて、「現今的新文学的概観」（半月刊『未名』第2巻第8期、1929・4・25）で次のように言う。

「こちらの階級からあちらの階級に移るのは、もちろんありうることです。しかし最も良いのは、意識がどのようであるのか、一つ一つ率直に言って、大衆に見てもらい、敵であるか友であるか、はっきりさせることです。頭にたくさんの古い残滓を留めながら、わざと隠して、芝居のように自分の鼻を指して、『われだけが無産階級である』と言うことはあってはなりません。」

馮雪峰は、『回憶魯迅』（人民文学出版社、1952・8、底本は、『魯迅卷』第8編〈中国現代文学社編〉）で、1929年に魯迅が階級移行の可能なことを述べたことを次のように伝える。

「『……実際、将来は無産階級の天下であることを見きわめて、まったくの利害

から考えて駆けつけるのも、どうしていけないことがあろうか。利害を説くことは、革命を汚すこととは言えない。小資産階級やたいへん高貴な文学者が、あらかじめ自身の利害から考えて、〈大衆を獲得〉しようとするのも、小資産階級と革命文学者を汚すことではない。真理のあるところを理解して、マルクスの言うように、階級を移行するのは、もちろん良いことだ。あるいは自分も圧迫を受けたために、反抗するために、あるいはただ良心のために、被抑圧者を助けたいと願うことはもちろん良いことだ。しかし自身の将来の利害からでも、いけないことは何もない。利害を喝破したのは、小資産階級の精神を暴いたこととは言えない。ただ、本当に自分が見きわめたと信じているのか、を問わなければならない。……それにさらに身近な利害を見てみなければならない。最後の勝利は必然であるが、しかしもしもまだ遙か遠くで、目下はむしろ生死存亡にかかわる闘争であるならば、——どうするのか。これこそ本当に小資産階級の精神を見なければならないことになる。……創造社の人たちは言う、小資産階級には二つの精神がある、と。私も確かだと思う。それで、暗黒の現状と闘争する勇気がなく、また良心を指して資産階級の汚れた説教だとし、利害はまた動機の純粋性を損なうところがあると言う。そこでただむなしく〈正しい階級意識〉を語るだけの結果となる……』(24頁)

*15: この点は、「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」(『大分大学経済論集』第33巻第4号、1981・12・21、のち『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第10章として所収)で、この点について論じたことがある。魯迅は、青野季吉「知識階級に就いて」(1926・3、『壁下訳叢』所収)等を翻訳することをとおして、革命的知識人の独自の役割について認識を深めたと思われる。

*16: 「魯迅と『蘇我的文芸論戦』に関するノート」(拙稿、『大分大学経済論集』第34巻第4・5・6合併号、1983・1・20、『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第9章)、「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」(拙稿、『大分大学経済論集』第33巻第4号、1981・12・21、『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第10章)でこの点について論じたことがある。

*17: 魯迅は「通信」(1927・9・3、『而已集』)で次のようにふり返って述べる。「私の中山大学に行った本当の気持ちは、もともと教師となることにすぎなかった。しかし幾人かの青年たちが盛大に歓迎会を開いてくれた。私は良くないと分かっていたので、最初の第1回目の演説で、自分は『戦士』とか『革命人』とかではないことを声明しました。もしもそうであるならば、北京や厦門で奮闘していなければならない。しかし私は『革命の後方』広州に身を隠しに来ている。こ

れこそ全く『戦士』ではない証拠である、と。」

*18:「魯迅と『蘇我的文芸論戦』に関するノート」(拙稿、『大分大学経済論集』第34巻第4・5・6合併号、1983・1・20、『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第9章)、「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」(拙稿、『大分大学経済論集』第33巻第4号、1981・12・21、『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第10章)でこの点について論じたことがある。

*19:「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」(拙稿、『大分大学経済論集』第33巻第4号、1981・12・21、『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第10章)でこの点について論じたことがある。

*20:この間、魯迅はしばしばソビエト・ロシアの過渡期知識人の悲劇に言及する。ブロークは1917年のロシア革命の波に飛びこみ、呑みこまれた。

「人は多く『生命の川』の一滴であり、過去を受け継ぎつつ、未来に向かうのである。もしも尋常なものと異なるほどに真に傑出しているものでないのなら、すべて前に向かい後ろを振り返ることを、合わせもたざるをえない。詩『十二』には、このような心を見てとることができる。ブロークは前に向かった。それで革命に向かって突進した。しかし振り返った、そこで負傷した。」(『十二個』后記)、1926・7・21、『集外集拾遺』)

エセーニン、ソーボリはロシア革命の進展の過程の中で、生きていけなくなり、自殺した。

「『最大の社会改革の時代において、文学者は傍観者であることができない。』

しかしラデックの言葉は、エセーニンとソーボリの自殺のために発せられたものである。彼の『帰るべき家のない芸術家』一篇がある期刊に訳載されたとき、私をしばらく思索にふけらせた。このことから私は革命前の幻想あるいは理想をもったあらゆる革命的詩人は、自分が謳歌し希望した現実につづかって死ぬ運命をもつのであろうと知った。しかし現実の革命がもしもこの種の詩人の幻想あるいは理想を粉碎しないのなら、この革命も布告上の空談にすぎない。しかしエセーニンとソーボリはひどく非難するほどでもない、彼らは前後して自分のために挽歌を歌った、彼らには真実があった。彼らは自分の沈没によって、革命の前進を証明している。彼らは結局傍観者ではなかった。」(「鐘楼上——夜記之二」、『語絲』第4巻第1期、1927・12・17、『三閑集』)

*21:「魯迅を語る——北支那の白話文学運動——」(山上正義、『新潮』第25巻第3号、1928・3)で、山上正義は、魯迅が広州に到着した1927年1月から約1ヶ月ほど後の言葉を次のように紹介する。(旧字体を新字体に改め、旧仮名遣いを新

仮名遣いに改めた。)

「『広東の学生も青年も革命を遊戯化しています。余りに甘やかされ過ぎています。真摯に見るべきものなく、真剣さの感ずべきものありません。むしろ常に圧迫され、虐げられつつある北方の学生、青年の中にこそ真剣さがあり、真面目さが見られます。

広東には絶叫、有頂天はあっても悲哀がありません。思索と悲哀のないところに文学はありません、……』斯んな調子だった。』

*22: 魯迅は、「鐘楼上——夜記之二」、『語絲』第4巻第1期、1927・12・17、『三閑集』で次のように言う。

「私が初めて広州に着いた頃、時には確かに安定した気分を感じた。数年前北方では、いつも党人が圧迫されるのを目にし、青年が捕殺されるのを見たが、そこに行くとするべて目にするのがなくなった。のちになってこれは〈上からの命令を受けた革命〉の現象にすぎないことを悟った。」

*23: 魯迅は「通信」(1928・4・10、『三閑集』)で次のように言う。

「以上は私がまだ北京にいたときのことであり、すなわち成仿吾のいわゆる、〈真相を知らない立場におかれて〉小資産階級であったときのことであり。しかしやはり文章を書くことに慎重でなかったため、ご飯の食いあげとなり、しかも逃げださなければならなくなった。そのため〈無煙火薬〉が爆発するのを待たずに、転々として〈革命の策源地〉に逃げこんだ。数ヶ月暮らして、私は驚いた、以前聞いたところはすべてデマであって、この所は、まさしく軍人と商人が支配する国であった。」

*24: 魯迅は中国の社会・文明に対する批判の必要性について次のように言う。

「私は早くから、中国の青年が立ちあがり、中国の社会・文明に対していささかの忌憚もなく批評することを希望していた。そのために『莽原週刊』を編集印刷し、発言の場としたが、残念ながら話をする人は結局少なかった。ほかの刊行物は逆に、たいいてい反抗者に対する攻撃であり、これは実に私があえて続けていくことを恐れさせるものであった。」(『華蓋集』題記、1925・12・31)

*25: 陳源に対する言及は、晩年の「我的第一個師父」(1936・4・1、『且介亭雜文末編』)にも現れる。

*26: 馮雪峰は、『回憶魯迅』(人民文学出版社、1952・8、29頁、底本は『魯迅卷』第8編〈中国現代文学社編〉)において、1929年前半における魯迅の発言を次のように記す

「『もしも、〈革命〉の広州でもあのような殺戮がありうることを予測できたか、

と問う人がいるなら、私は率直に言う、まったく思いもよらなかった、と。私も〈美しい夢〉を抱いて広州に行ったことはしばらく言うまい。そこでは、まだ〈合作〉のときで、私はこの目でそうした顔つきを見たとし、そうした誓いの言葉を聞いた。私が世故にたけていると言うのなら、あらゆる世故は役に立たないだろう。……まだあまりにもまじめで、〈芝居をする虚無党〉を信じすぎ、大きなベテンにかかってしまった……私はついに驚きのあまり呆然とした……血の代償によって、得た教訓はこのベテンを理解したことだけだ。』

また、『魯迅選集』第7巻（岩波書店、1956・9・22）「解説」（増田渉）は次のように魯迅の言葉を引く。

『国民党は有為な青年を陥穽に落としこんだ。初めは、共産党は機関車で国民党は列車だ、革命は共産党が国民党を引っばることによって成功するのだといった、あるいは革命の恩人だというのでポローヂン（当時、革命指導者としてソ連からきていた）の前で学生一同に最敬礼をさせたりした。だから青年は誰もが感激して共産党に入った。すると今度は突然、共産党なるが故に彼らを片端から殺した。この点は旧式の軍閥の方がまだ人がいい。彼らは最初から共産党を容れず最後までその主義を守った。彼らの主義が嫌なものだから寄りつかないとか反抗するとかすればいい。だが国民党のとったやり方はまるでベテンだ。その殺し方がまたひどかった。たとえば殺すにしても脳天へ一発の弾丸を打てばそれで目的は達せられるはずなのに、刻み斬りだとか生き埋めだとか、親兄弟までも殺したりした。僕はそれ以来、人をだまして虐殺の材料にするような国民党はどうしてもいやだ。憎しみがこびりついてしまった。僕の学生をたくさん殺した。』

